

歴史

二度の世界大戦と日本

—歴史から学んだことを、
これからの人生に生かす—

東京都 中野区立明和中学校 主任教諭 長井 利光

1 はじめに

これまで3年生の歴史的分野で太平洋戦争を扱うとき、戦争に関する身近な地域の歴史に触れてきた。1945年3月10日未明からの東京大空襲を学ぶ際には、当時を体験した方の話を聞き、授業を行ってきた。しかし、この単元を扱うにあたり、戦後70年以上経った今、戦争体験者から直接聞いた「歴史」は、遠い昔の話としてしか生徒に伝わっていないのではないかと感じてきた。そのような時、ロシアのウクライナ侵攻が報道された（写真1）。これまで遠い



写真1 朝日新聞 朝刊（2022年2月25日 記事中の写真は省略）

昔のことと感じていた戦争の歴史を、世界で起きている現状に触れずに、ただ「歴史」として教えるだけでよいのか考えるようになった。このことから、「ロシアのウクライナ侵攻」にも触れながら「単元を貫く問い」を設定した実践を、昨年行った。

今回、その実践を基に、『社会科 中学生の歴

史』（以下、教科書）第5章「二度の世界大戦と日本」の授業提案をしたい。歴史から学んだことをどのようにして生徒がこれからの人生に生かすことができるのかを考察したことも、あわせて紹介する。

2 「単元を貫く問い」を設定する

教科書第5章「二度の世界大戦と日本」の第3節「戦争に向かう世論」から第4節「第二次世界大戦の惨禍」（p.232～253）までを内容のまとめりとした。具体的には、世界恐慌から日本の終戦までである（全10時間）。

ここでの「単元を貫く問い」を以下に設定する。

「なぜ、二度も世界大戦が起きたのだろうか？
また、二つの世界大戦が世界に与えた影響とは何だろうか。これまで学んだ戦争の歴史を踏まえて、どのようにしたら、世界は平和になれるのだろうか？」

この「答えのない問い」については、ただ「平和」についての感想をまとめるのではなく、「歴史学習を根拠」に考えることとしたい。生徒が学んだ歴史学習を踏まえて、平和について自分なりの考えを持つことができるような問いである。授業は、ワークシート（図1）を使って進める。

「単元を貫く問い」に対しては、最初に生徒に予測を立てさせたい。すでに学んでいる第一次世界大戦を踏まえることや、この後に第二次世界大戦が起こることも想定して、最後の問いへつながる予想をさせる。「学びの予測」を立てることは、「主体的に学習に取り組む態度」を見取る上でも、非常に重要である。さらに、

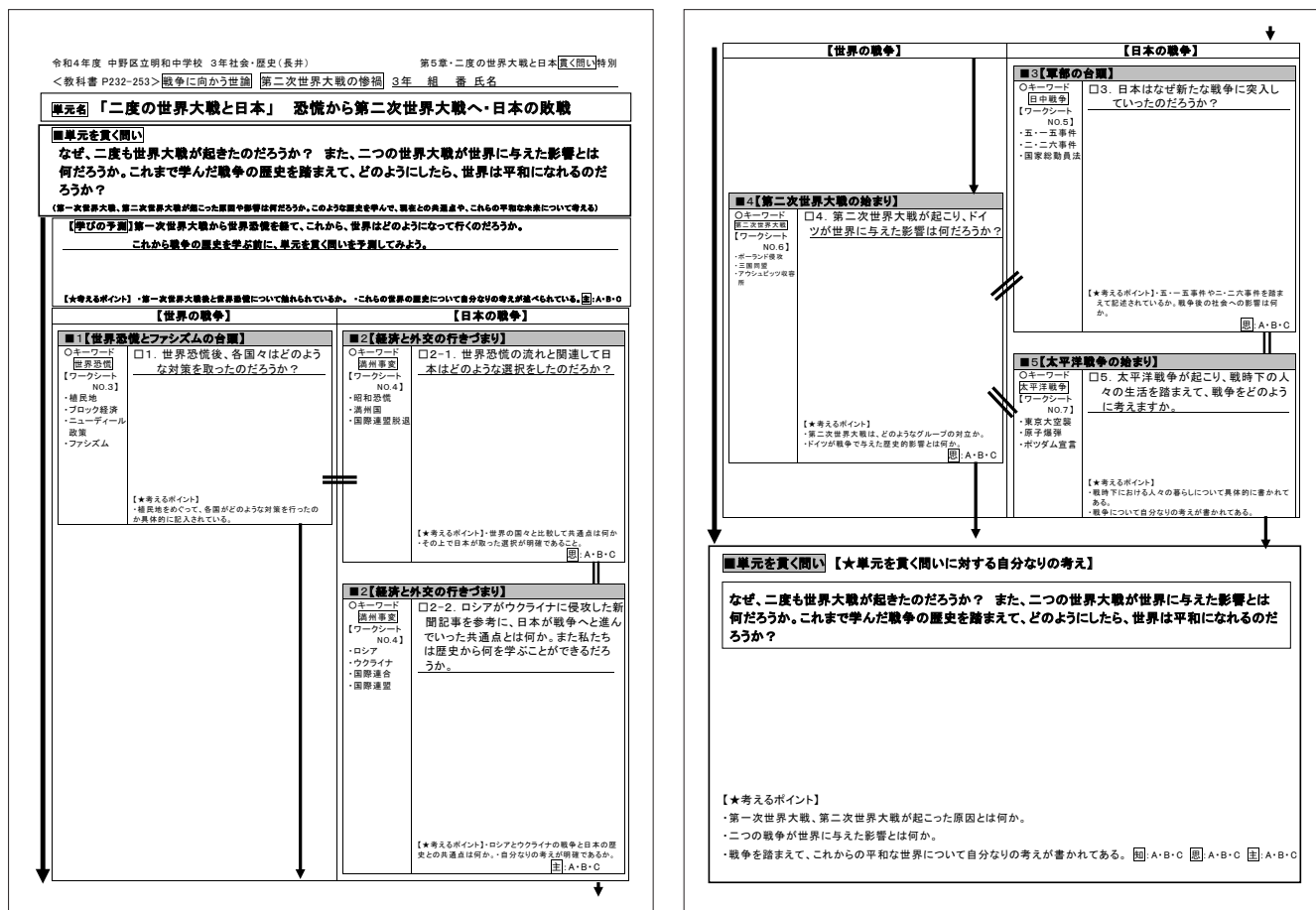


図1 「単元を貫く問い」を記したワークシート（一部変更）

授業ごとに問いを設定した（図1のワークシート中□1～5）。その際、ワークシートの左側には「知識・技能」に関するキーワードを、下の欄には【★考えるポイント】として、どのように記述すればよいのかを示した。この【★考えるポイント】は生徒への評価基準を示したものである。

授業を進めて行く過程で、ワークシートには「世界の戦争」と「日本の戦争」で関係のあるものには＝で結び、時間軸を➡でつなげる。最後に「学びの予測」やこれまでの記述をすべて読み返し、「単元を貫く問い」のまとめを記述させる。授業者の評価の詳細は次の通りとし、評価の観点（ ）に記す。授業ごとに生徒の記述に評価をつけるが、すべての授業で評価をつけるわけではない。

- ・ 第一次世界大戦、第二次世界大戦が起こった原因とは何か理解している。（知識・技能）
- ・ 二つの戦争が世界に与えた影響とは何かにつ

いて多面的・多角的に考察し表現している。
 （思考・判断・表現）
 ・ 戦争を踏まえて、これから平和な世界について主体的に追究し、自分なりの考えが書かれている。（主体的に学習に取り組む態度）

3 現在との「共通点」を探る

学んだことをどのようにして自分の人生に生かすことができるのだろうか。現在起きているロシアのウクライナ侵攻を報じる新聞記事（写真1）を示し、生徒の考えを深めさせたい。

歴史学習において、現在進行形の問題を取り上げるのは難しい。実践では当初、「単元を貫く問い」の欄外に、インターネット等から調べた情報を記入していくことも考えたが、それらは「歴史」として評価がされておらず、情報としても不確かな状態のものもあるため、授業で活用することは難しい。考えたのは、過去と現

在の状況での「共通点」を探ることである。

次の新聞記事と資料（日本が国際連盟を脱退したことを報道する1933年2月25日の新聞と満州国に関する資料）を取り上げる（図2）。



図2 「社会科 中学校の歴史」 p.236

実践では生徒に「なぜ、日本は満州国をつくったのか？」と「国際連盟の反対を受けて、日本はどのような対応をしたのか？」と発問してみた。生徒からは、「満州国を支配することで恐慌による日本国内の不景気の対策をするため」として国際連盟を脱退する意見が多かった。

同時に、ロシアのウクライナ侵攻における新聞記事を引用する。

ウクライナ侵攻をめぐり緊急に開かれた国連総会では、ロシアの孤立ぶりが印象的だった。(中略)ロシアの大使の発言は「責任はウクライナの現指導部と西側諸国にある」だった▼戦前の満州事変のあと、日本の立場もかくのごときものだったか。(中略)日本代表の松岡洋右はこう訴えた。極東の混乱の原因は中国の無秩序にある。日本は最大の被害を受けている――。歴史は繰り返すのか。いかに孤立しても間違った方向が修正されない(中略)がれきが広がる映像の裏で、一体どれだけの命が失われたのか。軍事施設しか攻撃していないというウソを、ロシア国民が信じてまだ思っているのか▼満州事変から泥沼の日中戦争へと、破滅の道を進んだのが日本の歴史だ。(後略)

朝日新聞「天声人語」一部抜粋 (2022年3月3日)

現在起こっている出来事について、すべてを知ることはできなくても、歴史上の出来事と現在起こっている出来事の共通する部分について

触れることはできると考えた。新聞記事は、日本が国際連盟を脱退した事実と国連総会でのロシアの発言が国際連盟脱退時の日本の主張と類似している点に注目して、歴史が繰り返される可能性について指摘している。この資料を活用し、「歴史から学んだこと」を、現在起こっている出来事を考える際に生かすことができないかと授業で引用した。

生徒には、上記の新聞記事を読んだ後、ワークシート（左）の□2-2の問いに記述させる。実践での生徒の記述を一部抜粋する。

自国を正当化していることが共通点だといえる。他国からの意見を聞き入れず、結果的に国際連盟の脱退や国際連合での孤立という道に進んで行ってしまった。自分たちの正当化が戦争の原因だと考えると、私たちは「違う視点から自らを客観視する」という能力を学び、養わなくてはならないだろう。

ワークシート（左）□2-2に対する生徒の記述（一部抜粋）

日本が国際連盟を脱退したことを踏まえて、現在起こっている出来事と歴史で学んだ出来事との共通点を探ることで、生徒はより深い思考を行い、さらにその後続く、日中戦争や第二次世界大戦の授業を通して、「平和とは何か」を考えるきっかけとした。

4 平和について考える

満州事変から日中戦争、第二次世界大戦から太平洋戦争について、日本の軍部の台頭、ドイツのポーランドへの侵攻などから、さまざまなアプローチが可能である。また、実践では、日本の東京大空襲を扱う際には、身近な地域の戦争の歴史を調べさせた。特に中野区は当時の資料がよく残っており、空襲警報が鳴った期日や時刻、爆弾が投下された場所、学童疎開した小学生の人数や宿泊先まで資料になっている。戦争を実感としてとらえるためにも、これらを活用しない手はない。

日本の広島・長崎への原爆投下から、ポツダ

ム宣言を受け入れ降伏し、さらに当時のソ連が北方領土などに侵攻したことまで触れて、生徒は最後に「単元を貫く問い」をまとめることになる。実践での生徒の記述を一部抜粋する。

第一次世界大戦も第二次大戦も「支配」による戦いだと思う。(中略) 両者とも植民地に囚われていたと言える。(中略) つまり、この時は「支配」が重視されており、「支配」は国の強さを表すものと考えられていたと思う。だから、みんな植民地を広げたり、他国に侵略したのではないだろうか。(中略) 世界が平和になるためには、支配だけでなく国と国とが対等な関係を持ち、相手を尊重すべきだと思う。歴史は繰り返されると学んできた。実際、今ロシアとウクライナの間で戦争が起きていて、大きな被害がおきている。(中略) 日本も無関係とは言えない。また、第二次世界大戦のような悲劇を繰り返さないためには、私たちが行動するべきではないだろうか。

「単元を貫く問い」に対する生徒の記述（一部抜粋）

「歴史から学ぶ」とは、その学びを現在、これからの人生に活用することだと考える。単なる学びで終わらせることなく、生徒自身の思考の基盤を培ってほしい。

5 地域の力を活用する

「平和とは何か」を考えさせた実践の後の3月、卒業の近い3年生に、「東京大空襲」について特別授業を行った。中野区の協力を得て、当時5歳で中野区で戦争を体験した方と、2022年2月24日にウクライナでロシアの侵攻を体験し、現在中野区に住んでいるウクライナの方を紹介していただいた。日本で戦争体験した方と、ウクライナで戦争体験した方を同時にお招きし、生徒に「平和とは何か」を改めて考える機会を持たせるとともに、日本の戦争を歴史から学び、その学んだことを、現在起こっている世界の問題について考えるきっかけを与えた。

戦争経験者からの言葉には重みがある。また時代を越えて戦争を体験した話とともに、現在進行形の戦争体験の話聞いた生徒が何を感じるのか。そして平和について自分なりにどう感



写真2 2人の戦争体験者を招いて平和について考える特別授業（筆者撮影）

じるのか、平和な日本に生きている私たちは何をすべきなのか。授業後の生徒の感想を一部紹介する。

<「平和とは何か」特別授業の主な内容>

- 中野区の戦争体験者から
 - ・たび重なる空襲警報や防空壕への避難
 - ・比較的食料があった当時の食料事情
- ウクライナの戦争体験者から
 - ・街なかで多くの戦車を見かけた
 - ・自宅近くに砲弾が落ちた
 - ・常に命の危険を感じていた
 - ※最後に生徒へ平和に関するメッセージ
- 授業後の生徒の意見（一部抜粋）
 - ・何度も命の危険を感じた。命は大切だ
 - ・日本は平和主義で戦争をしない意味を考えたい
 - ・死んで活躍するよりも生きて活躍したい
 - ・戦争は繰り返してはいけない
 - ・しっかり自分の気持ちや意見を主張する
 - ・正しく情報を共有して、私たちにできる事を考える

6 おわりに

今回、「単元を貫く問い」を通じて「平和」について生徒に考えさせた。さらに、実際に授業を受けて考えたことをきっかけとして、生徒が具体的に行動を起こせるような授業が求められている。戦争とは何か、平和とは何かを真剣に考え、自分には何ができるのか、さらにその後の人生に生かして行けるものと考えている。

帝国書院のWebサイトに、ワークシートを掲載いたします。

